

たとえば漢字の「漢」という字は「さんずい」だから、「水」に関係ある文字です。ではどうして「漢」には水の印がついているんだろう？ というふうに話をもち出します。

子どもたちは不思議だなという顔をします。そこで初めて、漢字の「漢」がどうして「さんずい」かという疑問を持つのです。

そこで漢字の「漢」のお話を始めます。まず中国の地図を書きます。幼児のいる家庭でしたら、ぜひ世界地図と日本地図は購入しておいてください。

こんな説明でいいのです。

「ここに黄河という川が流れているんだよ。中国の中央には揚子江というのが流れている。二つの川のちょうど真ん中を漢水という川が流れていて、そのあたりを漢と叫んだ。その漢の中ほどに漢中というところがあってね。昔、この漢中の王様に劉邦という人がいて、これがものすごい英雄だったんだ。項羽というもう一人の英雄と戦って秦の国を滅ぼし、漢帝国という王朝をつくったんだよ。なぜ漢王朝という名前をつけたかというと、漢水のちょうど中ほどにある、漢中の劉邦が王朝をつけたから、漢中の『漢』をとって国の名前にしたんだよ。

その漢という国は、今から2000年ほど昔につくられた国だけれども、中国を統一すると文字を新しく制定したんだ。漢王朝が制定した文字だから漢字という。この文字は隷書といって今の楷書とは少し違うけれども、楷書の基になる、つまり今の漢字の基礎だったんだ。だから今でも漢の名前を取って『漢字』といわれている。でも漢というのは川の名前だから、「さんずい」がついているんだね。」

こういう教え方をすると、漢字とはそういうものかと目が開かれるのです。そうすると子どもは考えるのです。どんな字でも「これはこうだよ」と言ってくるようになります。そういうときに、もし子どものいうことが違っていても、違うと言ってはいけません。

「面白いね、そうだね」と言ってやるのです。子どもが発明した考え方はみんな受け入れてやりましょう。

「違うだろう、そうじゃないよ」と言ってはいけません。

子どもなりに納得できれば、その漢字について認識が深まったことになりますから、何も「辞書にこうあるよ」ということを、いちいち言わなくてもいいのです。